読売新聞に掲載されました

（第3種郵便物認可）

がん患者 髪からケア

西宮病院内サロン・小谷さん

県立西宮病院内でヘアサロンを営む理容師の小谷和也さん(46)が、がん患者の「アピアランス（外見）ケア」に取り組んでいる。本格的に始めて4年間で、治療の副作用で外見の変化に苦しむ100人以上をケアしてきた。今後は全国の院内サロンと連携して支援の輪を広げたい考えで、「少しでも多くの人が前を向ける力になれたら」と意気込む。

「全国の院内ヘアサロンと連携したい」と語る小谷さん（西宮市で）

アピアランスケア　がん患者の外見の変化を補うケアを指す。抗がん剤や放射線治療では、脱毛や顔色のくすみ、爪の変色などの副作用が起こることがあり、患者向けに医療用ウィッグや専用マニキュアなどが販売されている。

小谷さんは祖父の代から続く理容店に生まれ、大学4年生の時、阪神大震災で西宮市の自宅兼店舗が全壊した。廃業の危機に立ち向かう父の姿に、後を継ぐことを決意。東京都立の理容専門学校に進んだ。

地元に戻ると、祖父母と同居していたこともあって高齢者の力になれるのがうれしく、老人ホームを訪問して髪を切る「訪問理美容」を専門に。2008年、祖母の見舞いで訪れた西宮病院に空き店舗があるのを偶然見つけ、「高齢の入院患者の役に立ちたい」と院内にヘアサロンを構えた。

常連客が増えてきた頃、抗がん剤による抜け毛に悩む女性の髪を、希望通り丸刈りに近い長さにバリカンで刈った。女性は「さっぱりした」と笑ったが、小谷さんには「単に短くするだけが理容師の仕事じゃないはずだ」と無力感が残った。

同時に、院内という立地から「医療用のかつらはないのか」という問い合わせも多く、患者が病気と闘う上で外見のケアが欠かせないことを実感した。15年、医療用ウィッグを準備し、本格的に取り組み始めた。

小谷さんが心がけているのは「徹底して患者に寄り添う」ことだ。丁寧に希望を聞きながら、着けてもらったウィッグにハサミを入れていく。つむじを意識し、もみあげや生え際、後れ毛をカットで作ると、より自然な見た目になる。「これで職場復帰できる」と、うれし涙を流す女性もいた。

3年前からは県内のがん患者グループ「ゆずりは」に参加。体験談を聞くことで、患者の不安な気持ちが少しずつ理解できるようになった。それからは患者のカットは完全予約制とし、個室状態にして周囲の目にさらされないようにした。

現在、小谷さんのもとには毎月50人ほどから相談が寄せられ、県外の患者も多い。全国に取り組みを広げる必要性を痛感しており、自身の経験や技術を伝え、ケアに取り組む院内サロンを増やしたいと構想を練っている。

小谷さんは「全国の病院に髪のことを相談できるヘアサロンがあれば、きっと力強いはず。医療とも連携して患者を支えたい」と夢を語る。

医療用かつら 自然な外見に

医療の進歩で治療後に社会復帰する患者が増えており、医療現場や自治体にもアピアランス（外見）ケアの考え方は浸透しつつある。

国立がん研究センター中央病院（東京）は、2013年からアピアランス支援センター

国、自治体も後押し

を開設している。治療による患者の外見の変化を補うためのウィッグなどを試すことができる。

国も外見ケアを後押ししており、昨年策定した「がん対策推進基本計画」に、がんとの共生で取り組むべき課題として医療従事者を対象にしたアピアランス支援研修を盛り込んだ。

山形県や鳥取県、大阪府河内長野市のように、医療用ウィッグを「外見の変化に苦痛を感じる患者にとって生活必需品」と位置づけ、購入費の一部を独自に助成する自治体も増えている。